題知らず　　讀人知らず

龍田川紅葉みだれて流るめり渡らば錦中や絶えなむ

此歌はある人奈良の帝の御歌なりとなむ申す

古今六帖にも、又、奈良の帝の御歌といふ一説によつて大和物語にも出てゐる。龍田川に流れる紅葉を錦と見立てた歌で、譬喩としては、平凡な着想であり、絢爛の趣においては、前の「柳櫻をこきまぜて」の歌に及ばない。併し、その錦の上を渡ると中斷するかも知れないといふ、意識的な巧智を弄した點が、味をやつた所で、一般に迎へられる思ひ附ではあるが、機智以上のものではない。卷五の歌。

題知らず　　讀人知らず

夕されば衣手寒しみよしのの吉野の山にみ雪降るらし

今よりはつぎて降らなむわが宿の薄押しなみ降れる白雪

これらは、萬葉風の歌の例であるが、此の歌の前に、同じ題詞のもとに並べて出されてゐる、

大空の月の光し清ければ影見し水ぞまづ凍りける

は、古今風である。月の光の映じてゐる水面を氷結したものと見立てた歌で、譬喩といふよりも、さういふ見立てといふべき點に趣向を凝らす所が、古今風なのである。以上卷六。

題知らず　　讀人知らず

わが君は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで

賀歌の卷頭にあるもの。もとより國歌の源として、國民の忘るべからざる歌であるが、これは、民間に行はれてゐた民謡的性質の歌であつたと思はれる。小石が成長して巖になるといふのは民間信仰として普通行はれてゐる習俗である。卷七の歌。

小野の千古が陸奥の介にまかりける時母の詠める

たらちねの親の守りとあひ添ふる心ばかりは塞きなとどめそ

萬葉風の作風。眞情のあふれてゐる秀歌である。お守りなどに添へてやつた歌なのであらう。その赴任地が陸奥であるだけに、一層親の身として息子の身の上が心配に堪へなかつたであらう。とにかく、此の歌は生きてゐる。卷八の歌。

ほのぼのと明石の浦の朝霧に島隱れゆく舟をしぞ思ふ

此歌はある人のいはく柿本の人麿が歌なり

歌聖人麿の代表作として、後世に喧傳せられたが、もとより人麿の作ではない。やゝ萬葉風に近い所もあるが、表現は必ずしも適切明確ではない。「朝霧に島隱れゆく」といふ表現の意味はわかるが、言葉の續け工合は、明晰ではない。「舟をしぞ思ふ」の主觀の表出も不自然である。かやうに表現の曖昧な點が、やはり、萬葉風と違つて、古今風に近い所以である。卷九の歌。

題知らず　　讀人知らず

よひよひに枕定めむ方もなしいかにねし夜か夢に見えけむ

卷十一の戀一の終の方に、題知らず、讀人知らずとして、六十九首ばかり、萬葉風、又はそれに近い、平安時代初期の歌が並んでゐる、その中の一首である。上三句は、物思ふ苦しさに展轉反側して寢られぬ意で、枕が定まらぬは、床についてから、いろ〳〵と身動きして、戀しさに惱む心を表したものである。さて、かやうにして、寢られぬ夜な夜なが

續くものの、いつか、夢の中で戀しき人の姿を見た事があつたが、あれはどういふやうにして寢た夜の夢であつたらうか、もう一度、ああいふ寢方をして見たいものだと、はかない希望を歌つた歌である。

戀しきに命をかふる物ならば死には安くぞあるべかりける

これは前の歌の次に出てゐるもの。戀しさと命と取りかへが出來るものなら、むしろ死んだ方がらくだ。人戀ふる心は、死ぬるにまさつて苦しいと、切實な情を述べた歌である。前の歌も此の歌も、稍誇張があつて、眞情惻々として人を動かすといふやうな歌ではないが、古今集の中にあると、かういふ歌でも、やはり感動に卽した所がある事を感ぜしめる。誇張があるのは、多分贈答の歌で、戀人に見せた作であつたからと思はれる。これが小野小町の作になると、

題知らず　　小野小町

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせば覺めざらましを

の如く、夢の中で戀人を見たのをもつて、自分が深く思つてゐるからだと考へ、更に、夢

と知つたなら覺めるのではなかつたと後悔の情を述べてゐる所、稍理智が入つて來て、感動に卽した歌に比すると、どうしても、その間に、稍距離が出來てゐる事を感ぜしめるのである。或は、同じ小町の歌に、

おろかなる涙ぞ袖に玉はなす我はせきあへず瀧つ瀨なれば

といふ機智を弄した作があつて、たとへ卽興的な贈答の歌としても、涙が「瀧つ瀨」の如しといふのは、あまりに誇張に過ぎて、不自然の感がする事を禁じ得ない。これが極端に進むと、涙の川に身を浮べるなどといふやうな着想にもなるのである。なほ、此の歌の「おろかなる」は、おろそかの意で、いゝ加減にしか思つてゐないあなたの涙は、袖に、露くらゐしか降りかゝらないのであらうが、私の涙は瀧つ瀨のやうに流れ落ちるから留める事が出來ないと云つて、思ふ情も、それに比例する事を現したものである。小町の歌は、女らしくてすぐれてゐるとされてゐるが、右の如く、智的傾向の加はつてゐる事を免れない。

併し、古今集時代の歌でも、

命やはなにぞは露のあだ物を逢ふにしかへば惜しからなくに

の如く、相當眞率な歌もある。その意は、命などは何でもない。それは露のやうに、はかないものに過ぎない。さういふつまらぬものは捨てても構はぬから、一夜戀人に逢ふ事が出來れば、その爲めに、命を捨てるくらゐ惜しいとは思はぬといふのである。

友則

典侍藤原直子朝臣

あまの刈る藻に住む虫の我からと音をこそ泣かめ世をば恨みじ

上二句は、海藻に寄生する蟲の名によつて、「我から」といふ語を云ひ出す爲めの序詞。かく戀に苦しむのも皆自分の心からだと思ひ、自分自身をせめて泣くやうな事があつても、世を人を恨むやうな事はすまいの意。なほ、世といふのは、一般に世の中の事をいふのではなく、特に戀の事を意味する例である。此の歌、伊勢物語では二條后の御歌としてゐて傳が違ふ。或は、これは、伊勢物語に、後人が、此の藤原直子の歌をとり、作爲して補入した、增補の部分なのでもあらうか、以上はいづれも戀の歌である。

なほ、卷十六の哀傷の歌、卷十七以下の雜歌にも有名な歌がある事は勿論で、殊に卷二十には、歌謠が集めてあつて、名高い歌、又、內容的にも表現の上にもすぐれた作が多いのであるが省略する。

蜻蛉日記

詠め暮らす程に(夫兼家ヨリ)文あり。「文物すれど、返事もなく、はしたなげにのみあめれば、愼ましくてなむ。今日も(オ前ヲ訪ネヨウ)と思へども」などぞあめる。これかれそゝのかせば、返事書く程に日暮れぬ。まだ(使ガ兼家ノ所ニ)行きも着かじと思ふ程に、(夫兼家ガ)見えたる。人々「なほあるやうあらむ。(兼家ニ對シ)情なくて氣色を見よ」など言へば、思ひ返してのみあり。(兼家)「愼しむ事のみあればこそあれ、更に來じとなむ我は思はぬ。人の氣色ばみ癖々しきをなむ怪しと思ふ」など、うらなき氣色もなければ、氣疎く覺ゆ。(兼家)「翌朝は物すべき事のあればなむ。今明日明後日の程にも」などあるに、誠とは思はねど、思ひ直るにやあらむと思ふべし。もしはた此度ばかりにやあらむと試みるに、漸漸また(兼家ガ訪レズニ)日數過ぎ行く。されば よと思ふに、ありしよりも殊に物ぞ悲しき。つく〴〵と思ひ續くる事は、なほいかで心として、死にもしにしがなと思ふよりほかの事

もなきを、ただ此の一人ある人（子息ノ道綱）を思ふにぞいと悲しき。「人となして、後安からむ女などに預けてこそ、しかも心安からむとは思ひしか。いかなる心地して流離らへむずらむと思ふに、なほいと死にがたく、いかがはせむ。形を變へて、世を思ひ離るやと試みむ」と（道綱ニ）語らへば、まだ深くもあらぬなれど、いみじうさくりもよゝと泣きて、（道綱）「さなり給はば、まろも法師になりてこそあらめ。何せむにかは世にも交ろはむ」とて、いみじくよゝと泣けば、我もえ塞きあへねど、いみじさに、戯れに言ひなさむとて、「さて（法師ニナッテ）鷹飼はでは、いかが從はむずる」と言ひたれば、やをら立ち走りて、し据ゑたる鷹握り放ちつ。見る人も涙塞きあへず。まして日暮しがたし。心地に覺ゆるやう、

　爭へば思ひに佗ぶる天雲に先づ逸る鷹ぞ悲しかりける

とぞ。

日暮るる程に（兼家ノ）文見えたり。天下の空言ならむと思へば、「只今心地惡しくて。漸今は」とて遣りつ。

七月十日にもなりぬれば、世の人の騒ぐまゝに、盆の事、年頃は（兼家ガ）圓心に物しつ

るも、離れやしぬらむと、哀れ亡き（母）人も悲しう思すらむかし。暫し試みてすら、齋もせむかしと思ひ續くるに、涙のみ垂り暮すに、（兼家ノ許ヨリ）例のごと調じて文添ひてあり。（著者）「亡き人をこそ思し忘れざりけれと、惜しからで悲しき物になむ」と書きて（兼家ニ）物しけり。

かくてのみ思ふに、なほいと怪し。（兼家ノ心ガ）めづらしき人に移りてなどもなし。にはかにかゝる事（兼家ガ冷淡ニナッタ事）を思ふに、心さへ知りたる人の「失せ給ひぬる、小野の宮の大臣（兼家ノ伯父實頼、此ノ年五月十八日薨）の御召人どもあり。これらをぞ思ひ懸くらむ。近江ぞ怪しき事などありて、色めく者なめれば、それらに、此所に（兼家ガ）通ふと知らせじと、かねて絶ち置かむとならむ」と言へば、聞く人「いでやさらずとも、彼等いと心安しと聞く人なれば、何か然わざわざしう構へ給はずともありなむ」などぞ言ふ。「もしさらずは、先帝の皇女達がならむ」と疑ふ。「ともあれかくもあれ、ただいと怪しきを、入る日を見るやうにてのみやはおはしますべき。此所彼所に詣でなどもし給へかし」など、ただ此の頃は異事なく、明くれば言ひ、暮るれば嘆きて、さらばいと暑き程なりとも、げ

に然言ひてのみやはと思ひ立ちて、石山に十日ばかりと思ひ立つ。忍びてと思へば、兄弟といふばかりの人にも知らせず、心一つに思ひ立ちて、明けぬらむと思ふ程に、出で走りて、鴨河の程ばかりなどにぞ、いかで聞きあへつらむ、追ひて物したる人もあり。有明の月は、いと明けれど、逢ふ人もなし。河原には死人も伏せりと見聞けど、恐ろしくもあらず。粟田山と言ふ程に行き去りて、いと苦しきを、打休めば、ともかくも思ひ分れず、ただ涙ぞこぼるる。人や見ると、涙は情なしづくりて、ただ走りて行きもて行く。山科にて明け離るるにぞ、いと顯證なる心地すれば、吾か人かに覺ゆる。人は皆遲らかし先立てなどして、かすかにて歩み行けば、逢ふ者見る人怪しげに思ひて、さゞめき騷ぐぞいと佗びしき。

辛うじて行き過ぎて、走井にて破籠など物すとて、幕引き廻して、とかくする程に、いみじく喧噪る者來。いかにせむ。誰ならむ。供なる人見知るべき者にもこそあれ。あないみじと思ふ程に、馬に乘りたる者あまた、車二つ三つ引き續けて、喧噪りて來。「若狹守の車なりけり」と云ふ。立ちも止らで、行き過ぐれば、心地のどめて思ふ。あはれ程に從ひ

ては、思ふ事なげにても行くかな。さるは明暮（兼家ニ）膝まづき歩く者、物して行くにこそはあめれと思ふにも、胸裂くる心地す。下衆ども車の口に付けるも、さあらぬも、この幕近き邊寄りつつ、水浴み騷ぐ振舞の無禮う覺ゆる事物に似ず。我が供の人、僅に、「をゝ、立ち退きて」などいふめれば、「例も往來の人寄る所とは知り給はぬか、咎めるは」など言ふを見る心地は、いかがはある。やり過して、今は立ちて行けば、關打越えて、打出濱に、死にかへりて到りたれば、先立ちたりし人、舟に菰屋形引きて設けたり。物も覺えず這ひ乘りたれば、遙々とさし出だして行く。いと心地いと佗びしくも苦しうも、いみじう物悲しう思ふ事類なし。申の終ばかりに、寺の中に着きぬ。

蜻蛉日記は、平安時代の婦人の日記文學としては、最もすぐれた作品であると思ふ。夫の愛の薄れゆくを嘆き、子の愛に生きようと努める、男に賴つて生きてゐた當代の女性に共通の惱みが、簡素な筆で、生き生きと寫し出されてゐる。これは著者の、正確な心の記錄である。體驗の赤裸々な告白である。ただ文章が非常に難解なので少し困るが、よく讀みこなす事が出來れば、此の日記が、此の時代の文學の代表的作品である所以を

明かに知ることが出來よう。ただ、此の著者は、必ずしも弱々しい性格の持主ではなく、一方には強く生き拔かうとする粘り强さを持つてゐる。

文章は、源氏物語風の文章であるよりも、むしろ土佐日記の文章などに近い所があつて、當代の文章の圓熟期に入る以前の、簡素な文章を示すものであるが、さすがに女性に特有の柔軟な筆致を持つてゐて、丁度、竹取物語や土佐日記などのごとき漢文脈の影響の濃い男性的文章から、源氏物語のやうな女性的物語文に移る過渡期の文章の特色が見られる。

此所に拔いた所は、限られた紙數に收まるやうにと思つて抄出したので、あまり思はしくはなく、又、此の作品は、一部分拔いただけでは、それほどよいと思はれないやうな所でも、全體を通じて見ると、實にうまく書けてゐて、味が出て來るのであるから、その積りで、此の文章を讀んで貰ひたい。とにかく、飾り氣のない、しかも必要な點を逸せずに、委曲をつくした表現は、此所に拔いた文章だけでも、よく分ると思ふ。

これは、天祿元年六月晦日から七月十日過ぎまでの間の事で、此の年、著者は、三十

五六歳くらゐ、愛人の兼家は四十二歳、子の道綱は十六歳であつた。兼家は攝關家の名家で、子息に道長らがある。此の年八月には右近大將となつてをり、兄兼通と攝關の地位を爭つて不和であつた事は、此の日記の、此所に出した文章の少し前にも著者が觸れてゐる所である。さういふ高貴の兼家に比して、此の日記の著者は、身分も低く、ひけ目を感じてゐる上に、兼家の口先のうまい陽氣な性格に比して、眞面目すぎるくらゐ、物を眞劍に考へ込む此の著者の性格との相違が、次第に、二人の間に溝を作つて來た。女の方では、兼家が他に愛人を持つたのだらうと疑ひ、氣晴らしに、石山寺に參詣に出かけたりする。その石山に行く途中、鴨河に人の死體が横はつてゐるといふ話を聞いたり、平生なら、兼家の前に這ひつくばふ若狹守の從者の豪慢な態度に憤慨したりして、心はますます憂鬱になるばかりである。さういふ著者の心理や、子供の道綱、夫の兼家との間などに取りかはされる會話を通じて、それ〴〵の人々の心の動きが巧みに寫し出されてゐる點などを見逃してはならないと思ふ。

なほ、此の文章は、契沖書入本によつた、日本古典全集の蜻蛉日記から拔いた。今の

所、此の全集本が最もよいと思つたからである。他の叢書などに入つてゐるものは、殆どすべて、蜻蛉日記解環といふ註釋書が、勝手に文章の難解な所などを改めたのであるから信用が置けない。但し、どうしても解釋出來ないやうな箇所は、極く僅か、此の註釋書の說を參照して、訂正した所がある。又、その後、喜多義勇氏の蜻蛉日記講義といふ良研究書が、最近新しく出てゐる。今これをも參照して甚だ得る所があつた。

新風樹立時代の名句鑑賞

此所には、池西言水、小西來山、上島鬼貫、それに山口素堂を附して四家の句を鑑賞する。年の順に（但し、素堂は最年長であるが、これは別として）評釋を加へる。

うの花も白し夜半の天の河　　言水

「江戸八百韻と云集撰み侍りける時、素堂と打つれ歸るさの夜いたく更ぬ。所は本庄、一鐵の許。家まばらにして、かきね卯花咲り」といふ自註がある。俳諧の歷史の側面史として興味の深い句。それのみならず、夏の夜更の淸涼の感じがよく出てゐる。所は江戸の本所あたり、人家まばらな場末、といふよりもむしろ郊外と云つた方が適切な場所で、夜目にもしるく垣根に卯の花の白く咲いてゐるのが眼に映つた。併し、二人づれで淋しい道を辿りながら、中天をしろ〳〵と横斷してゐる天の河に、作者の眼はひかれてゐた。天の河を仰ぎながら、夜道を歩いてゐた作者は、ふと眼を下に落したとたんに、そこの垣根にぼ

つかりと白い色を亂してゐる卯の花を見出したのである。此の地上にも暗黑に浮ぶ白い色がある、と作者は、天の河の雄大な美しさに心がひかれてゐただけ、一層、地上に見出した可愛らしい卯の花の白さに、親しみを感じ、鮮明な印象を受けたのである。「卯の花も」の「も」といふテニヲハに注意すべきである。

高峯より礫打ち見ん夏の湖　言水

比叡山で詠んだ句である。「湖上の眺の涼しさを」といふ自註がある。叡山から見下す眼下に、廣がつてゐる鏡のやうな琵琶湖の姿、あれに、石を打ちつけて見たいやうな氣持がすると、子供の無邪氣な、いたづら心が、ふとよみがへつて來るのを捉へて、率直に表現したもの。尤も、比叡山をはじめ、都人士の遊ぶ岡や山では、土器投の遊が、どこにでも大抵設けられてあつたから、これも、土器投の事が、連想されてゐたのかも知れぬが、句の表には、少しもさういふ介在物の姿を見せず、無邪氣に吟じられてゐる。

兒消ぬ奥はさゞん花崩壁　言水

「美童の跡をしたひしにその俤をうしなふ。つゐひぢのくづれより入て見れば、山茶花の

さけり。さては、花の精魂あらはれたるか」といふ自註がある。何となく怪談めいた印象を與へるが、併し、これは作り物でなく、作者の眼に映じた實景である。時刻は夕頃、壁は崩れ、薄暗く荒廢した一軒の家の奥の方には、さびしく山茶花が咲いてゐる。さうして、美しい少年が、どこからともなく現れて、その家の中にすうと入つて行つて姿を消した。勿論、此の少年は、此の家の子供で、どこかに使にでも行つたのか、遊びからの歸か、とにかく、外から自宅に歸つて來たのに違ひない。さうして、さういふ荒廢した家屋に住む人の子供であるから、なり恰好もあまり綺麗ではなかつたらう。薄汚ない鼻をたらした子供が、あばら家の自宅に歸つて來たのに、作者は遇然出あつたのに過ぎない。併し、さう云つてしまつては現實暴露である。「美童の跡をしたひて」と美化し、更に淋しい凄味を見せて、そこに一抹の艶麗な氣を漂はせた所に、此の句の手がらがある。芝居がかりと惡く云へば、さう評されぬ事もないが。(以上は『初心もと柏』に據る。)

木枯の果はありけり海の音　言水

此の句によつて、木枯の言水と稱されてゐる程に、言水の代表作となつてゐる。此の句、

木枯の淋しい音と、冬の海の凄みを帶びた音とが、入り交りに聞えて來るので、木枯の音の過ぎ行く果は、あの海の音となつて聞えるのだと云ふのである。たゞ、木枯の音と海の音との交響を、印象に映じたまゝ、無邪氣に素直に吟じたのであるなら、佳句となる可能性がある。併し、「果はありけり」の表現は、折角の材料を、肝腎の所で、打ちこはしてしまつたと言ふべきである。木枯の音にも果がある、それは何かといふと卽ち海の音である、といふ風に、此の表現には理窟が入つて來てゐる。少くとも說明に墮した所がある。世間に喧傳せられるだけの佳句たる條件は備へてゐるが、表現で失敗してゐる。併し、世に迎へられたのは、むしろ、かゝる說明的表現が、俗受のする、一ひねりひねつた味を持つてゐるからであらう。

芋洗ふ女に月は落にけり　言水

『東日記』に見える句。野趣の滿ちた中に、一脈艶麗な趣のある句である。秋の流れるやうな美しい月に照し出された芋洗ふ女の姿は、繪のやうな情景である。芋洗ふは、恐らく川端であらう。家の裏の井戸端などではあるまい。いづれにしても、かうした背景を考へ

る事によつて、一層此の句の美しさは增す。『東日記』は談林調の句が多く集められてゐるが、稀にかういふ句も見出す事が出來る。それが言水の言水たる所以であらう。芭蕉の「枯枝に烏のとまりたるや秋の暮」も亦、此の集に收載せられてゐるのである。

水踏んで草で足ふく夏野かな　來山

「在所めづらしく、あらぬかたまでさまよひまはりて」といふ詞書がある。言水の句から來山の句に來ると、狹くるしい眺の所から、急に廣い野原が開けたやうな氣がする。自由濶達な豪放洒脫な句風である。私には、一茶の句風を思ひ出させる所があるが、一茶の如く、腹の中に一もつを含んだやうな所はない。右の句の如きは、都會から田舍に、たま〳〵遊びに行つた人の、田園風景に親しんだ喜びの情が、飾らずに出てゐる。「水ふんで」の如き口語調は來山の好んで用ひる所、「草で足ふく」といふのは說明の如くにして、さうではない。わざ〳〵「草」といふ事を詠み入れた所が、此の句のやまである。夏の郊外のさわやかな感覺が巧みにあらはされてゐる。

古火燵また足はさむわかれかな　來山

「貧家にうたゝねて」と詞書がある。必ずしもすぐれた句ではないが、割合に素直に感情が出てゐる。古火燵を抱いて、貧しい家に一晩假寢した。或は、晝間此の家にしばらく休息したとも見られる。貧しい家だが暖いもてなしに懷かしみの情を禁ずる事が出來ない。出立にあたり、別離の情に堪へかねては、又古火燵を足ではさんで出立を逡巡するといふのである。(以上は『今宮草』に出づ。)

我寢たを首上げて見る寒さかな　來山

來山の句の飄逸な特色の一面が見られる句。寒いので、寢床から首だけ出して、あたりを見廻す。あたかも、薄團の中にすつぽり入つてゐる、自分の寢姿を眺めるかの如くである。かやうな句は、惡くすると、川柳となる。併し、此の句はあく迄も俳諧であつて川柳ではない。それは結句の表現に、重要な要因がある。此の結句を、「寒い時」とか「獨り者」とか云へば、一層川柳に近づく。つまり、現象を一般普遍化するか、作者自身の體驗として個性化して表現するかの差である。此の句の如きは、此の點、結句に、作者の感動が力強く籠められてゐるのであつて、川柳趣味からは遠く隔たつてゐる。作者は、朝の寒さ

に肩まで蒲團の中に埋めて、龜のやうにたゞ首だけを出し、わが寢姿を見てゐる自分の姿に、ふと、あるをかしみを見出したのであらう。それと共に、さういふ自分の姿に、一種の愛著の情をも感じたであらう。さうして、しみ〴〵と朝は寒いなあと感じた事であらう。此の體驗に直接つらなつてゐるが故に、結句の感動が生きた表現を得てゐるのである。併し、「宿のない乞食も走る村時雨」等、作者の洒脫な詠風は、どうかすると川柳的題材を取り扱ふ事があるやうだ。

白魚やさながら動く水の色　來山

泉石が「云ふたりや〳〵。此の句について思へば、白魚と云ふ名さへくちをし。煮て後なれば也。此魚は只水いろにこそ」と評してゐるに盡きる。「さながら動く」は實に巧みな表現である。

行く年や石嚙みあてて齒にこたへ　來山

「何をいうても老は身にひとつ〳〵」といふ詞書のある歳暮吟である。今日では、さういふ句は最早陳套な感じがするが、やはり、作者の實感のよく出てゐる句である。

春の夢氣の違はぬが怨めしい　來山

「淨春童子、早春世をさりしに」といふ詞書がある。愛子に先立たれた時の句。哀切の情堪へがたいものがある。「氣の違はぬが怨めしい」といふ率直な表現が、切實である。さうして、はかない「春の夢」に、幸福な併し短い愛子の面影をしのび、かつ、愛子の法名と、その死んだ時節とを詠み入れてゐる所は、簡潔にして且つ象徴的な、巧みな俳諧的表現である。「うらめしい」といふ口語的表現もさる事ながら、「春の夢」といふ初句により、亡き愛子の生命が、作者の感情の中に美しく且つ哀れに生かされてゐるのである。卒然として吟ずると戀の句の如く取られ、どうかすると失戀の句などと解釋せられさうであるが、此の場合、詞書が甚だ重要な位置を占める事になる。

短夜を二階へたしに上りけり　來山

實感の強いか淺いかよりも、むしろ表現の巧緻なるを見るべき句。短夜の眠の不足を足す爲めに、二階へ寢に上つたといふのである。階下は人々が起き出でて騷がしいから、靜かな二階に上つたのである。これは、朝の事か、或は晝寢の事かとも解されるが、とにかく、市井の生活の動いてゐる所が、此の句の取りえであらう。「二階へ」といふ句が、さういふ生活の背景を思はせる。

行水も日まぜになりぬ蟲の聲　來山

これも泉石の評に「秋の初風、句の中から出るであらう」と云つてゐる通り、初秋の情景が巧みに表現せられてゐる。それに、行水と蟲の聲の取り合せは、稍定跡的な感じがするが、此の句では、その間の呼吸がうまくあつてゐて、「行水の捨所なき蟲の聲」(鬼貫)の如き嫌味もなければ、卽き過ぎてもゐず、說明にも墮してゐない。すきのない句である。

秋立つとゆふべも知らずたはひもの　來山

「たわい者」は酒に醉つて正體のない者をいふ語。此の句には、酒仙來山の面影が浮んでゐる。「十萬堂において沈醉のあまりに書す」と記して見たり、「母に別れて後、大醉に及ばぬ時は、一日も夢に見ぬ事なし」とも書いてゐる。酒に親しんだ來山の純眞な生活が、此の句には巧まずにあらはされてゐる。立秋の句などと云へば、形式的な題材や表現で、そのくせ何か一趣向やつて見たがるものであるが、此の句には、前の晩から、酒に醉ひし

れて、たはひなく寢たが爲めに、立秋といふ事も知らず、まして、立秋といふ掛聲を聞いて、殊更に秋らしさを感ずるといふやうな事もなしに、立秋を迎へ、立秋だぞ、俳人が立秋を知らないやうな事ではどうすると云はれて、ほほうさうか、全く氣がつかなかつた、昨晩もすつかり醉つ拂つたものだからね、ととぼけた樣子でいふ。――これは私の想像だが、さういふ所のある句である。「世を千年とこれとは大福長者のこと葉」といふ、浮世草子の見出しのやうな詞書は、此の場合、さまで拘泥する必要はあるまい。いづれはこれも、醉つ拂ひのくだのやうなものである。生命は長いと思つて、先の事をくよ〳〵するな、それが金持になる秘訣だ、と大福長者が敎へたから、自分もその敎の通り、月日の立つ事などは考へず、いつが立秋、いつが歳の暮などといふやうな事も思はずに、酒にでも醉つて、呑氣に世の中を暮さうといふ意であらう。そのせゐか、先づ、作者の生活も大福長者に近かつたやうである。「春草の橋を限りて酒屋なし」などといふやうな句にしても、漢詩から來てゐる題材と思はれるが、酒仙來山だけに、一層びつたりとあふ。

春風や堤ごしなる牛の聲　來山

「春風」と「牛の聲」も、やはり定跡的な取り合せであるが、川邊に放牧されてゐる牛のどかな鳴聲が聞えて來て、春眠をさそふのは、何と云つても、春らしい感じが出てゐる。

涼しさに四つ橋を四つ渡りけり　來山

來山の句として人口に膾炙せられてゐる。併し數字の疊みかけは、どうも嫌味な感じがする。「爰の事も四つほど思へ六の花」といふ句も數字を弄した吟である。（以上『續今宮草』による。）

うち晴て障子も白し春日影　鬼貫

曙や麥の葉末の春の霜　同

言水の稍官覺に訴へるやうな纖細な味から、來山の奔放な句に移り、更に、鬼貫に來ると、來山の持味に一脈の通ふものがある事を感じさせるが、來山ほど放縱ではなく、溫藉な趣があり、氣品、持味の豐かな作品もある。併し、一面において、感情の醇化と高騰とを缺き、平俗に墮する危險がある。此所にあげた二つの句は、印象鮮明な句であるが、稍說明に流れてゐる。「障子も白し」の「も」は、印象を一點に集中する事から放れて、散漫

ならしめてゐる。「曙や」の句も、初春の曉の感じは出てゐるが、「春の霜」と「春」といふ語をおいて、わざ〳〵説明する必要はなく、「曙」とあるから、「春」なる事は明かで、もつと霜の具象性に印象を集中せしめる必要があつたのである。「春の霜」と季節感を強調して、その霜が、いかなる狀態であるかを、これにより、暗示的に漠然と感ぜしめようとしたのであらうが、成功してゐるとは思はれない。私は、鬼貫には、かういふ、今一息といふやうな句が多くて、句數の多い割合に、佳句は案外少いやうな氣がするのである。

狀見れば江戸も降りけり春の雨　鬼貫

遠くはなれた江戸からの便を見ると、江戸でも春雨が降つてゐるやうだと、數百里はなれた所が、同じやうな氣節の雰圍氣に包まれてゐる事に輕いおどろきを感じた句。何でもない句のやうであるが、成程さうだと感ぜしめる。「春の雨」である事が、一層此の句に現れてゐる都會地にふさはしい。五月雨でも村雨でも具合がわるい。かういふ經驗は、われわれも常に味ふ所である。

野の末やかりぎ畑をいづる月　鬼貫

「かりぎ」は夏のものであるから、夏の句である事は明かである。夏の夜の野原の果、そこに廣がつてゐるかりぎ畑から出づる圓々たる月。いかにもさわやかな景である。

飛鮎の底に雲ゆく流かな　鬼貫

これも涼しい夏の句である。場所は、平原を横切つて流れる川であらうか。「流かな」といふ句は、むしろ山間の小流を思はせる。併し、「底に雲ゆく」の句は、相當川幅も廣く、ゆつたりと流れてゐる川がふさはしいやうであるが、「飛鮎」の初句と共に、これはやはり山間の流れと解した方がよからう。そこで釣糸でも垂れてゐるのであらうか。じつと川の面を眺めてゐる。と、銀鱗を日にかゞやかしながら、鮎がはね上がる。川の底には、白い夏雲の走つてゆくのが映つてゐる。動的な自然の一瞬間を巧みにとらへて寫し出した句である。

ゆく水や竹に蟬なく相國寺　鬼貫

これも、上來の句に傾向の似た佳句である。流水、竹、蟬、寺の配列は墨繪のやうな趣致がある。

ひや〳〵と月も白しや秋の風　鬼貫

鬼貫が江戸に赴いた時の旅行中の句。淀川を溯る夜舟に寢て、船中に吟じたもので、「夜は牧方、葛葉のさとにふくれど、川浪枕の下をたゝきて、夢もむすばず、心はすさみて」とて此の句がある。船中に寢ころんで空を見ると、秋の月が白々とさえてゐる。さうして、ひや〳〵とした風が身にしみるのである。旅愁と秋の寂寥たる感じとが一つになつて、句の裏ににじみ出てゐる。(以上『鬼貫句選』から抄出した。)

柴の戸や入日をぬすむ秋の風　鬼貫

「葉鷄頭に蟷螂をかきたる繪に」といふ詞書がある。此の繪は、柴の戸の閉してある庭さきの景であらう。さうして、此の小景の背景となるものを描いたのが、此の句である。もう夕方、日はまさに入らうとして、秋風が、しづかに、音を忍ばせて吹く。「入日をぬすむ」は一寸變つた表現であるが、「ひまをぬすむ」「眼をぬすむ」の如く、かくれてひそかに事を行ふ意で、此所も、入日の中に、ひそかに秋風の吹き行くを云つたものであらう。此の畫讃の句は、「水仙に千鳥を書きたる繪に」といふ詞書のある「夜を殘す風猶さむしひとつ

窓」といふ句と同樣のよみぶりである。(この句は『七車』に出づ。)

によつぽりと秋の空なる富士の山　鬼貫

鬼貫の句中でも有名な作である。秋の空につき立つてゐる富士山の姿を詠んだものであるが、初句の「によつぽりと」が此の句の生命で、此の句の解釋により、此の作が成功してゐるかどうかが決せられる。此の表現は、とにかく生きてゐると云つてよい。「によつぽり」といふ形容が、空中につき立つてゐる、併し、屹立といふ感じはなく、丸味を帶びて廣がつてゐる富士山の全容を、巧みに表現してゐる。少しも角々しい所がなく、何となく親しみ深い感じを抱かせ、しかも紺碧の秋空にそばだつ富士山の偉容、その秀麗な相貌が、此の句に含められてゐる。ただ併し、あの富士山の清らかな氣品は、此の形容からは感じさせられない。そこが缺點といへば缺點といふ事も出來るであらうが、かやうな唯一つの形容語で、富士山を生かさうといふのは難中の難事だ。それだけ、此の表現は、此所では適切といふの他はない。(これには長い前書があつて、『鬼貫句選』にも『七車』にも出してゐる。)

目には青葉山郭公　初鰹　素堂

素堂の句は少い。併し、以上の三家に比して最も氣品があり雅趣がある。一番芭蕉に近附いてゐると云つてよからう。尤も、それには、以上の三家が關西の人であるのに對し、素堂は關東の人であるといふ事も考へておく必要があらう。大阪と江戸との相違は、どうしても句品にも現れて來る。それに、各人の教養、環境といふやうなものの影響といふ事も考へられるが、それが、結局、地方的特色を反影する事にもなると言はれるであらう。勿論、各人相互に影響し、又談林調の影響によつて、同じ傾向の句が、此の四家のいづれにも多く見られる事はまぬかれないが。

所で、此所にあげた句は、最も人口に膾炙してゐて、作者の名は知らないでも、誰もがことわざのやうに引用する句である。「鎌倉一見の比」といふ詞書があり、鎌倉に旅して吟じた句であらう。清新な初夏の印象を鮮明に感じさせる事物を列擧して、作者の眼に映じたと同じ印象を讀者にも傳へようとする。それが成功してゐるかどうかは疑問であるが、いかにも江戸つ子の喜ぶ、ぴりりとした齒切のよい口調を持つてゐる。これは鎌倉の大觀

を一望のもとに詠み入れたものと思ふ。作者は、今鎌倉の山と海との中間に當る位置に立つてゐる。ふと見る眼の前には初夏の匂を發散させる新綠のすが〳〵しい色。さうして、山手へ眼を移せば、その頂には郭公が鳴き、海岸の方へ眼を落すと、そこには初鰹の大漁である。といふやうに、山・中・濱の景を一句の中に並べた情景を思ふと、勿論、大した句ではなくとも、さりとて捨ててしまつたものではないといふやうな氣がする。

塔高し梢の秋の嵐より　素堂

「忍の岡のふもとへ家を移しける比」といふ詞書がある。塔は上野の五重の塔であらう。秋風が上野の森の梢を吹き過ぎる。その森の間から、塔が高々と突き出てゐる。空高く聳立する塔は、いかにも秋の風物にふさはしい。「九月十三夜游園中十三唱」の中の第十一「月一つ柳ちり殘る木の間より」も、これに似た表現を持つ佳句である。

雲なかば岩を殘して紅葉けり　素堂

「石山」での作、雲に半ばつき入る如くつき立つ岩山。その山の半ばは雲がかゝらずに殘されて、眼で見る事が出來るが、それはすべて眞赤な紅葉で覆はれてゐる。餘りに繪畫的

な構圖の句であるが、大げさな言ひ方の中に、滿山紅葉といふ大觀が、可成り巧みに生かされてゐる。（以上『素堂句集』による。）

去來抄・三册子鑑賞

此の兩書に出てゐる句を鑑賞する。先づ去來抄から始める。

蓬萊にきかばや伊勢のはつ便　芭蕉

先師評の初に出てゐる。此の句は、芭蕉自身の解釋によると「今日神のかう〳〵しきあたりを思ひ出て、慈鎭和尙の詞にたより、初の一言を吟じ、淸淨のうるはしきを蓬萊に對して結びたる也」とある。この慈鎭和尙の詞に賴つたといふのは、拾玉集卷四にある、

このころは伊勢に知る人訪れて便り色ある花柑子かな

といふ歌の事である。此の歌の初句を諸註に「此の春は」「此のたびは」「此のほどは」などとし、四句を「便り嬉しき」としてゐるが、本文の如くあるのがよい。此の歌によつて「便り」といふ語を用ひ、新春に事よせて、「初」の字を入れて「初便り」としたのである。但し、此の歌は、拾玉集では夏十五首の中に入れてゐる如く、全く夏の歌なのである。又、

「便り」の語も、消息の意に解するのではなく、ゆかり、ゐにしの意に解すべきが如くである。それで、芭蕉は、此の歌を誤解してゐたやうに思はれる。多分貞門以來の俳人の間に傳へられてゐた俗說によつて誤られたのであらう。今年の春、伊勢の知人を訪れて、その知人の所から、此の夏便りをよこし、花柑子を送つて來たといふやうな意味にでも解してゐたのではないかと思ふが、それは慈鎭の歌の眞意ではない。とにかく此の句は、和歌の方の引歌と同じ性質の作なのであるが、かゝる方法がよいか惡いかは別問題として、芭蕉の眞意はそこにあつた。

元日といふと神社の事が思ひ出され、初詣などといふ事が直ぐ思ひ浮ぶ事、現在でも鐵道省のポスターによつて知られる。さうして、初詣と云へばまづ伊勢大神宮であるが、交通不便な當時では、伊勢まで初詣に行かうなどとは餘程閑暇に惠まれた人でなければ難かしい。そこで、大神宮の元日の樣子はどうであるか、せめて、床上に飾られた蓬萊に聞きたいといふのである。「はつ便り」は、此所では、手紙そのものとは解さずに、手紙の內容に書かれてゐる事、卽ち、神域の模樣などを意味するものと解すれば、句意は安らかである。

併し、一般に解されてゐる所とは違ふかも知れぬ。「蓬萊」を伊勢の御師の名などと解するのは俗意であるが、さりとて、ただ、伊勢の神々しい樣と、蓬萊の淸淨でうるはしいのとを氣分で結びつけたものとだけ解したのでは、はつきりしない。元日蓬萊に對する時、何となく年あらたまるの感を深くする。かういふ時まづ伊勢からの年賀の詞でも受け取る事が出來れば、一層新春の氣分が濃厚となるであらう、といふやうに解するのが普通であらうが、私は初のやうに解したい。丁度かう書いてゐる時、新聞では、「神苑朝」の勅題により、元旦の朝、大神宮の神苑にマイクロフオンをすゑて、朝まだき參拜の人々の足音、拍手の音から五十鈴川の流の音まで、全國の聽衆に聞かせると報じてゐたが、ラヂオに小さい〆飾りを張つて床の間にでも置けば、忽ち、芭蕉の句が現實化されるといふものである。ただ、元旦の靜かに落ちついた古風の感じを愛する人が、これによつて、近代的な機械化に興味を殺がれない限りは。

行春をあふみの人とをしみける　芭蕉

尙白が「近江」は「丹波」でもよく、「行春」は「行年」でもよく、卽ち、語句が此の一句

にのつびきのならぬものでない點をあげて難じたのを聞いた芭蕉は、去來の意見を徵した所、去來は「尙白が難あたらず、湖水朦朧として春ををしむに便有べし。」と言ひ、「行年、近江に居たまはゞ、いかでか此感のましまさん。行春丹波にゐまさば、もとより此情うかぶまじ。風光の人を感動せしむる事眞なるかな」と言つたので、芭蕉は「ともに風雅をかたるべきものなり」と言つて喜んだといふ。(花實集や梟日記等にも同じ事が見えて有名な話柄であつた。)「近江の人」に、あの琵琶湖の秀麗溫和な風光を暗示せしめ、それが晩春の情景とぴつたりあつてゐる所に、「行春」と「近江」の二つが、拔き差しならぬ組合せであつた事を知る。前の句の「蓬萊」と「伊勢」との組合せが、此の句では「行春」と「近江」との組合せとなつてゐるわけで、さういふ意味から言へば、かういふ表現は、可成り常套的な、さうして、可成り確實に成功を收める事の出來る效果的な一種の技巧であつたと言つても差支へあるまい。併し、私には、どうも暗示に過ぎて、その氣分が、ぴつたりとは來ないのだが。それよりむしろ、

此木戸や鎖のさゝれて冬の月　其角

下京や雪つむうへの夜の雨　凡兆

の如き句なら、はつきりと分るし、文句なしに、名句だと言ふ事が出來る。前の句は、下五、冬の月、霜の月のいづれがよいか作者は置きわづらつたが、衆議によつて、「冬の月」がよいときまり、又、上五も「柴の戸」とあつたのを、芭蕉は「此木戸」でなければならぬと言つて改めさせた。此に對し、凡兆は兩方どちらでもよいといふ考であつたが、去來は「冬の月を柴の戸に寄つて見れば尋常の氣色なり。是を城門にうつして見れば、其風情あはれに物凄き事はかりなし」と言つてゐるが、全くその通りで、そゝり立つ城門の大木戸に黑光りする鎖が、寒月に照らされて、白々と霜の置いてゐるのまで見える景情は一點の動きもない道具立である。ただ、私どもには聊か芝居の舞臺めく感じを與へられるが、當時の人には、これがしんと靜まり返つた荒涼たる實景として感じられた事であらう。後の句については、初め上五がなく、下の七五が出來て後、芭蕉が、此の上五を附けて、これにまさる句はあるまいと自負した事が傳へられてゐる。(青根が峰にも同じ事が見えてゐる。)いかにもその通りで、私は此の句を吟すると何となく祇園邊の事が思ひ浮ぶのだが、

あそこは、上京に屬するのか、それとも下京に屬するのか知ら。とにかく、東京で言へば、淺草情調が此の句には、最もよくあてはまつてゐて、銀座でもなければ、新宿でもない。それに、此の雪と雨は、冬のそれではなく、春に違ひない。春の淡雪が積つてゐる上に、春雨がしと〳〵と降り注いでゐるのである。(季の概念は、此所では離れて鑑賞した方がつたりとする。)實に軟調な和みのあるよい句で、春の惱ましいやうな人懐かしいやうな感情をさへも、胸に響かせる。(淡雪に雨が降つては道路が泥濘となつて、さぞ汚ならしい事であらうなどといふ現實感は、此所では一寸取り除いておいて貰ひたい)。だが是は、下二句を作つた凡兆の手からであらうか、それとも、上五を考へた芭蕉の手からであらうか。いや、さういふ事をいふのは、手を叩いて、右が鳴つたか左が鳴つたかときくのに等しからう。(去來抄評に「下京は上京に對する詞なり。上京ならんには、雪つむ上の小灯燈とも作るべし。下京に夜の雨とは、人の一人も不通淋しき所、雪の上に雨さへ降て、其感を起し侍る事深し」とあるのは、私の感じと違つてゐて、そこに大分時代の隔りのある事が分るが、去來抄評の方の感じ方が正しいのであらうか。) 此の句の前に、

うづくまる藥の下のさむさ哉　丈艸

が出てゐる。これは、大阪で芭蕉が最後の病床に寢てゐる際、看護に侍した人々が夜伽の句を作つた時、丈艸の此の句をもつて、芭蕉は最も賞したといふ事であるが、いかにも實感の溢れてゐる句である。芭蕉の死んだのは十月であるから、既に秋も暮れて夜寒を感ずる時節である。さういふ實際の季節の感じを表出してゐる中に、師の病氣を案ずる心中が、惻々として汲み取られるのである。

靈棚の奥なつかしや親の顔　去來

はじめ、去來が作つたのは「面影のおぼろにゆかし魂祭」といふ句であつた。さうして、此の句を芭蕉に見て貰ふ爲めに送つた時、添書に「祭時は神いますが如しとやらむ、靈棚の奥なつかしく覺侍る」といふ旨の事を認めた。それに對する芭蕉の返事として、「面影の」の句は、尤もではあるが古くさい、なぜ、その手紙の文中にある「靈棚の奥なつかしや」を使つて、句にしないかとさとし、此の上五は和らかであるから、下五をはつきりと「親の顏」と置けば句になるであらうと教へたといふ事である。(花實集にも同じ事が出て

ゐる。）これによると、此の句は、まるで芭蕉が作つたもののやうであるが、とにかく、芭蕉の門下教育法とか、又、句作の良否とかいふ問題について、深く考へさされる實例になるといふ點で、此の句は興味深いものであるが、そればかりではなく、句自身としても、やはり切々たる眞情のにじみ出てゐる佳句である。いかにも芭蕉の言へる如く、「面影の」の作は古くさいばかりではなく、「おぼろにゆかし」などといふ表現は、作爲の跡歴然たるものがあつて、到底眞情の認むべきものはない。もとより、作者は、眞情を僞らうなどといふ考はなく、むしろ、どうすれば、自分の本當の情が最も感動深く表現せられるかについて、いろいろ考へあぐみ、工夫をこらしたのであらう。その工夫の結果が、「おぼろにゆかし」となつたもので、つまり、これは工夫によつて作られた句なのである。そこに、眞情を表現しようとして、實は眞情の隱される動機がひそんでゐる。さうして、眞情を僞るとまでは行かなくても、却つて眞情を作り出さうとする結果にもなつたのである。芭蕉はこれを見破つて、むしろ添書の中に、眞情の溢れてゐる率直な表現を認め、何故それをもつて句にしないのかと敎へたのである。「親の顏」は、いかにもはつきりし過ぎる句では

あるが、併し、これによつて一層、眞情の切實なる表現を認める事は出來る。かういふ句では、取合せの妙をねらつて、此所に何か植物の名などを置いて、上の句にふさはしい雰圍氣を作らうなどと巧んでも、さういふ工夫は、結局失敗に終る事であらう。

つかみあふ子どものたけや麥畠　遊力

此の句を、凡兆は、麥畠は麻畠でもよいではないかと言つて、此の下句の必然性のない事を取り出して難じた。それに對して、去來は、麥は麻でもよく蓬でもよろしいと論じた。所が芭蕉は、さういふ論は無用であると云つて、これを制した。かやうに、ある語句を一句の中で拔き差しのならぬものであるかどうかを考へる事は、當時も盛んに行はれてゐたやうである。併し、芭蕉は、さういふ論を無用とした。對境から得た感じを、如實に生かす所に、句の生命があると、芭蕉は考へたからであらう。併し、此の句では、麥畠が最も適切である。子供の丈に麥の伸びてゐる頃、卽ち、これは初夏の季と思はれるが、その爽やかな季節にふさはしく、潑溂として喧嘩をしてゐる田舍の子供、そこに何か延びゆく者の力强さといふ事さへも感じさせられる。少くとも、此の句の持つ明朗にして爽快且つ健

康な感じは、麥畠によつてその色彩が生かされてゐるのである。麻や蓬では、よくない。

次に同門評の部に入る。

笠提て墓をめぐるや初時雨　北枝

芭蕉の墓に詣でた時の作。「墓をめぐるや」の句に眞情の表出を認めて、去來は、これが「笠提て門に這入るや」とあるなら、傍より人を見ての句ともなるが、「墓をめぐるや」に、作者の情が出てゐるとした。いかにも適評である。時雨の中を、笠を提げたまゝ、師の墓の周圍を、低徊去りもやらず歩いてゐる。「笠提て」といふ句に、師に對する敬愛の情が示され、「墓をめぐる」に親愛追慕の情が感じられる。しかも、初時雨が、一層しんみりとした情趣を添へて、首をうなだらしめる。

うの花に月毛の駒の夜明かな　許六

去來は、此の句と同趣向の句案を持つてゐた。即ち、上の五七は「有明の花に乘込む」といふ句であつたが、此の下に續けておく句に困つた。月毛駒、芦毛駒といふと詞がつまるし、と云つて、のを入れると字餘りになるし、鮫馬は雅でなく、紅梅、錆月毛、川原毛など種々思ひめぐらしたが皆駄目であつたのに、此の句を見て、自己の不才を嘆じたといふ。

さうして、人名でも、畠山左衞門佐といふと大名の名になるが、山畠佐左衞門と字を置き更へると庄屋の名となる。かくて、同じ題材でも、表現においては、かやうに種々句を置きかへて、案じて見る事を說き示してゐるのである。いかにも初學者的なさとし言ではあるが、實際問題としては、さういふ場合が多く、最初に詠んだ句作りが中々頭を離れないものである。

それにしても、去來の「花に乘込む」の句は、あまりに常套的である。櫻と馬の取合せは、「咲いた櫻」の小唄以來、既に世に古るされてゐる。これはどうしても卯の花でないと、清新な感じが出ないのである。但し、「月毛の駒」と「夜明」とは、どうも言葉が卽き過ぎて面白くない。これは勿論、炭俵の如く、「芦毛の馬」とあるべきであらう。その詞書に「旅行に」とあるから、旅行に出た時の句である。爽かな五月の早朝、馬に乘つて、卯の花の咲く中を、出立する氣持よさ、すが〳〵しい感じが身にしみて心を引き緊める。併し、此の句の表面からだけでは、若武者を描いた畫作のやうな感じさへも起させるので

ある。

應〳〵といへど敲くや雪の門　去來

もとより名句として名高いもの。おう〳〵といふ擬聲語が此の雪の情景に最も適切である。家の中で「おうおう、今あけるよ」と返事をしても、外では、雪の爲めにその聲が消押されて、よく聞えないのか、なほもしきりに門を叩いてゐる。雪の中で物を云ふと、雪の重さで、含み聲のやうに聞える。家の中から外に叫ぶ時でも、同樣に雪の壓力で消押される。此の聲の感じを表現するのには、此の擬聲語が最も效果的である。

白雨や戸板おさゆる山の中　助童

「白雨」はゆふだちと訓む。此の句去來はほめて、「此句初學の工案ながら句體風姿あり、語路滯らず、情ねばりなく事あたらし。最當時流行のたゞ中也」と賞し、「此兒、此下地ありてよき師に學ばゞ、いかばかりの作者にか至らむ。第一いまだ心中に理窟なき故なり」とも言つてゐる。少年の無邪氣な率直な作が佳句をなす事を認めてゐるのである。いかにも稚拙ではあるが、寫生の眞髓を得てゐる。芭蕉の時代でも、やはりかういふ句は、佳句と

して認められたのである。

本書の修業教の部は、蕉門の精神を理解する上に重要な章で、さび、しをり、細み等の根本的な理念を解する際にも、常に引用せられ參照せられる部分である。從つて、全章珠玉の文字に滿ち滿ちてゐるが、その片々たる教の中でも、たとへば、「ふるふがごとく小糠雪ふる」と云ふ句を、「打あくるごと小糠雪ふる」と云へば句勢が出て來ると教へた芭蕉の言の如き、さすがは鍛錬者の感じ方の正確鋭敏なるを思はしめる。かういふ適切で實際的な指導を受けては、門下の手腕がめきめきと上達し、蕉風全體の藝術的價値を高めたのも、むしろ當然であつたと思はれる。

次に、三冊子に移るが、その中、白冊子と黑冊子とについては觸れる所がない。すべて赤冊子より揭げる事とする。いづれも芭蕉の句である。

馬に寢て殘夢月遠し茶の煙

有名な句ではあるが、これは杜牧の詩に示唆され、且、二句の表現はどうも檀林の氣味があつてしつくりしない。併し、その初作、「馬上眠からんとして殘夢殘月茶の煙」とあるの

に比べ、更に、その初句を「馬に寢て」と改めたが、それでは二句があまり拍子に乘り過ぎてよろしくないといふので、右の如く改めたといふ、推敲のあとを辿ると、巨匠の苦心が忍ばれて、單なる檀林的な興味本位の想出と異なる事が考へられるのである。いかにも南畫的な淡く縹渺とした情趣を感じさせる句である。殊に坐五の「茶の煙」に至つては、初から、芭蕉はこれに手を附けてゐないが、いかにも此の句の生命は坐五にあつて、これだけはどうしても動かせぬ所である。

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の棚

芭蕉は、これを其角の「聲枯れて猿の齒白し冬の月」と比べて出し、それは、いかにも其角らしい作であり、自分の句は老吟であつて、下五をただ「魚の棚」と言つた所も自分の句であると、自讃してゐる。卽ち、其角の才氣をほとばしらせた、芝居氣のある作に對し、自分の句は枯淡な自然のまゝの句である事を述べてゐるのである。これは至言で、其角の句は、繪に描かれた句である。冬の寒さ、凄みを出さうとして、却つて艶なる趣をさへ忍ばせてゐる。それに比すると、芭蕉の句には、しみじみとした底寒さを感じさせるものがあ

る。繪に描かれた景ではなく、眞實の自然そのまゝである。これは手腕とか個性とか才能とかいふ事もさる事ながら、さういふ問題よりも、やはり人間としての修業の至り至らぬのけぢめであらう。

六月や峯に雲おくあらし山

「雲おくあらし山」といふ句作が、骨を折つた處といふ。いかにもさう思はれる。夏雲の空に浮んでゐるのを、山を主體として、「雲おく」と表現した所、苦心の作とは思はれるが、到底枯淡の高き境地には及ばない作り物といふ感がする。それにしても、此の句が夏の感じを如實に表現した佳作である事は否まれない。

牛部屋に蚊の聲くらき殘暑哉

此の句、はじめは「蚊の聲よはし秋の風」とあつたのを、かやうに改めたのであるといふ。初のまゝでも、相當感じが出てゐる句ではあるが、その感じは、普通の人が誰でも持つてゐるもので、未だ表面的な淺いものである事を免れない。かく改めたのによつて、詩としての深さを湛へるやうになつた。蚊の聲が暗いといふ象徵的な表現が殘暑や牛部屋の感じ

と相俟つて、何か執拗な重苦しい壓力を持つて來てゐる。「蚊の聲よはし秋の風」では、何も「牛部屋」たるを必要としないであらう。むしろ、兩者の間に、氣分の上で遊離したものを感じさせるくらゐである。

ひや〳〵と壁をふまへて晝寐哉

これも殘暑の句といふ。「ひや〳〵」とは、もう初秋となつた、或は少くとも秋の忍び寄るのを感じさせる表現である。併し、此の句の生命は、足裏に感じる冷氣、その鋭敏な官覺の發見にある。「ひや〳〵と」といふ擬態語だけでは、いかにも膚淺な表現としか取られないのに、此の句の中にあつては、それが、官覺の鋭さによつて裏附けられた、こくのある語となり、生きて來てゐる。併し、試みにこれを「ひえびえと」といふやうな語におきかへて見ると、これはまたひどく浮薄な感じになる。それで、「ひや〳〵と」といふ適切な擬態的表現の發見が、此の句に生命を付與する所以となつてゐる。

秋風や桐に動てつたの霜

此の句は、はじめは「梧うごく秋の終りや蔦の霜」とあつたのを改めて、右の如くなつ

たのであるといふ。はじめは「秋の終り」とあつたのを、その「終り」を取つて、代りに「秋風」と改められたものである。「蔦の霜」とあるので、この句に表現せられた景情が冬近き晩秋なる事は明かなのであるから、此所に「秋の終り」とあるのは、説明に過ぎない死んだ表現となるわけである。そこでそれを「秋風」といふ表現に改めて、桐の動く感じをもつと深めようとしたものらしい。所で、問題は「桐動く」と「桐に動く」の表現の相違であるが、桐動くと自動的に言へば、此の秋風は、むしろ木枯と言つた方に近い强い風を思はせる。それに對して、「桐に動く」と言へば、木の葉のまばらな冬枯を思はせる桐の木末を、僅かに動かす弱々しくも薄ら寒い秋の風を意味するのである。此の場合、いづれが、此句に最も適切な表現であらうか。實は私としては、むしろ烈しい木枯に桐の木の搖られる方が、晩秋の感じにふさはしくないかと思ふのであつて、「秋風や桐に動て」の表現は、むしろ初秋の感じであらう。或はむしろ夏の行かうとしてゐる頃の句であるとさへ感ぜしめる。ねつとりと木の葉の垂れて暑苦しさうに靜まり返つてゐる桐の木の梢に、かすかに秋風が動き始めた、――さう解すると、それは晩秋の表現ではない。從つて坐五の「蔦

の霜」といふ句とは合はないといふ事になる。さう見ると、私は、此の句をもつて、未だ必ずしも成功した句とは言ひ難いやうに思ふ。がとにかく好感を與へる句である。芭蕉一流の腹の底を押しかくしたやうな所がなくて。

此道や行人なしに秋の暮

此の句、「人聲や此道かへる秋のくれ」といふ句と並べて出し、どちらがよいかと人にもたづねたが、結局「行人なしに」の方にきまり、「所思」と題をつけたといふ。「所思」といふ題によつて、此の句が、芭蕉の藝術上の心境を含むものとする推測は、必ずしも當つてゐない事はないであらうが、「人聲や」と考へ合せると、やはり、もとは單なる自然の句として作られたもののやうである。「行人なしに」が、藝術道に關するなら、「人聲や」も亦藝術道に關する事となる。此の俳句の道を一人で行く寂しさに堪へかねてゐると、ふと人聲が聞えて、同じ志の友を得たやうな氣持がするので、その方に後戻りをして、その人々の仲間に入らうとする氣になる。――かう解しては、「此道かへる」の句が、せつかく芭蕉の進んで來た俳句の道を逆戻りしさうで、面白くない。これは、敍景の句が、自然に芭蕉

の心境にも合致する如く考へられて來たのであらう。はじめは偶然に深い意もなく作られたものが、暫くたつて眺めると、思ひがけず、ある種の心境をうまく言ひあててゐたと自分乍ら感ずる事もある。かくて「所思」は後に題せられた所なのであらう。

清瀧や浪にちり込青松葉

此の句、はじめは、「大井川浪にちりなし夏の月」とあつたが、大阪で病床に臥した時、園女の所で「しら菊の目に立て見る塵もなし」といふ句を作り、それに似てゐるので、作りかへたのであるといふ。同じ句を去來抄では「清瀧や波に塵なき夏の月」としてあげ、同樣の事を記してゐる。(同じ事は旅寢論や青根が峯にも見える)。尤も、去來抄は初作の方を傳へたもので、その改作は卽ち、三冊子に出したが如くである。同じ「塵なし」の句を、兩作に出す事を厭つて、改作したといふ芭蕉の良心は尊むべきである。ましてそれが重病の床に臥す際なるに於て、一層さういふ芭蕉の良心が輝きを增す。さて、去來抄にあげた「清瀧や浪に塵なき」といふ表現は不可であつて、これはどうしても「大井川浪に塵なし」の方でなければならない。(笈日記にも、此の句で出してゐる)。大井川といふ廣々

とした川であるから「塵なし」といふ形容が生きるし、又、此所は「塵なし」と力強く言ひ切つた表現であるべき所である。それに夏の月が水に浮んでゐるといふ涼やかにして悠揚たる夏の夜景を描いたものであるが、これを「清瀧や」と改めるや、全體の句作をかへて、俄然、松葉の散り込む動的な表現に變化せしめ、しかも「青松葉」に新緑の生き〳〵とした色彩感を盛つて、青い筋を引き白い泡を沸騰せしめる瀧の落下と對照させた。これによつて、景狀を一變させた手腕はいふまでもなく、同じ發音の「ちり」といふ語をおいても、「塵」を「散り」に變化せしめて、同じ語句を用ひながら、自由自在な變化を與へてゐる所は、巨匠が多年の練磨の結果得られた豐富な經驗によつて、はじめてなし能ふわざなのであらう。靜動の巧妙な變化のさばきは、精巧なレヴューの舞臺面の轉換をさへ思はしめるのである。

川柳の鑑賞

川柳の解釋をする前に、川柳の由來に就いて記すべきであるが、此所ではそれを略す事にして、その由來を知りたい人は、國民文庫の川柳集の卷頭に出てゐる川柳の歴史や、川柳難句評釋の總說、坂井久良岐氏の川柳梗概、或は早稲田文學明治三十九年一月號所載の川柳史料や、近世國文學史の雜俳の部等を參照せられたい。早速解釋にうつる事とする。先づ、柳樽三篇(明和五年刊)よりはじめる。初篇と二篇とは、武笠山椒氏の俳風柳樽通釋があり、初篇にはまた沼波瓊音氏の柳樽評釋もあつて、殆ど全部の句解が載つてゐるから、それを端折つて、三篇に入るのだが、何しろ各篇六七百もある句を一々やつてゐては、埒が明かぬ故、よいと思つた人事生活に關する句を主として、若干句を拔いて揭げる事とする。出さない句は分らないのだらうなどといふ怪しからぬ推測はなすべからず。何しろ若輩の拙者、人生の裏表を見通した川柳子の腹を見拔く事が出來るか否か、甚だ疑はしい。

誤解の點あらば幾重にもお詫びをする。

内儀へはしらずに出る草履取

旦那の御用には、尻を端折つて、膝坊主もあらはに、ふんどしまでお目にかけて、庭先に膝まづく草履取も、おかみさんに呼ばれた時には、ふんどしまで見られるのは恥かしいから、その前では一寸體裁をつくろはうといふもの、人間の感情の機微を穿つた句である。

仲條はむごつたらしい藏をたて

仲條流は婦人科醫者の稱であるが、當時は寧ろ墮胎專門の女醫と認められてゐた。そこで、胎兒を墮して儲けた金で藏を建てるからむごつたらしいと言つたのである。あまりよい句ではないが、當時の暗黑面を示すものとして、こゝに取つた。

物さしで雪をつゝつく日記づけ

隨分雪が積つた。三寸位、四寸もあらうか、今日の日記にこれを記さなければならぬと、物指で測る。いかにも有りさうな事。

料理人ひよいとほうつてかみ合せ

砂糖を一匙、醬油をちよつぴり、さてこれで味は丁度よいかなと、箸の先で豆を一つつまみ、ひよいと放り上げて、口でぱくりと受け、嚙み合せながらしげ〳〵と味はつて、うむ、これでよし〳〵。こまかい所を捕へて、うまく描寫した句である。

悪方はあぶら見世など思ひきり

悪方とは、芝居の敵役の事である。當時、俳優は内職に油見世や小間物見世などを出して賣つたもので、お轉婆の娘や後家たちが、あれは菊五郎の店、あれは吉右衛門の店、時時は店に坐つてゐるので素顏が拜めるよ、といふわけで、わざ〳〵廻り道しても髮油などを買ひに來るから、なか〳〵繁昌したものである。但し、敵役の役者だけは、舞臺の上でいつも憎まれてゐるから、この内職は思ひ切らなければならぬ。あまり穿ちすぎてよい句ではないが、皮肉な、物の裏を見る所が川柳らしい。

たいこ持がつかりとしてよめに逢ひ

いつも若旦那の取卷となつて悪所にお供をし、たんまり頂き物をしてゐた幇間、近頃とんと若旦那のお顏が見えぬ、御工合が悪いか、或はかねて嗜の花嫁でもお貰ひになつたか

と、久しぶりに伺つて見ると、案の定、見なれぬ初々しい丸髷姿の女が、しかも素敵な美人が出て來て、どなた、と言はれたので、此んな美しい人を貰つて、かう身が固まつては若旦那のお出ましがないのも尤も、それにしても、金箱を一つ失つたとはさて〳〵惜しい事とがつかりした。このがつかりが甚だきいてゐる。この下句を「後家に逢ひ」とすると、ひいきの旦那が死んだ事になる。

愛そうにごぜはあやして泣出され

瞽女が呼び入れられて、やんれ節を一つ歌つて見よといふ事なので、三味線の調子を合す。おかみさんが子供をだいて、傍に坐りながら、「ほら、べん〳〵がなるから、おとなしくしてゐるんだよ」といふ。瞽女はそれを聞いて、「おや、坊つちやまもお聞きですか、ほんとにおとなしい事」と、御愛想に、顔を子供の前につき出して、妙な顔をして見せる。合憎、それが盲目の白眼を大きく見開いて、ぎろ〳〵とやるものだから、當人は子供をあやしてゐる積りでも、子供はおびえてわつと泣き出す。今でこそ東京には瞽女の姿も見えないが、江戸時代には瞽女の門附が多かつたので、かういふ場合もあり得るわけである。

のびの手で髻へさわつて嗅いで見る

ふと眼が覺めて、うーつと伸びをするはずみに、隣に寢てゐた細君の頭の髻へ手の先がさはる。ぬるりと氣味惡い感じがするので、驚いてその手を引込め、鼻の先へ手をあてて嗅いで見ると、ぷんと髮油の臭ひがする。實にうまい。簡單な句の中に、複雜な行爲と心持とが、巧みに動いてゐる。かういふ所を捕へるのが川柳の妙味である。

よめの顔見い〳〵まきを一本引

薪割がまきを庭先で引き割つてゐる。それをその家の嫁が出て來て、面白さうに見てゐる、薪割も、ちら〳〵と、嫁の顔を見ぬやうで竊み見しながら、やう〳〵薪を一本引き割る。男の感情をうまく捕へてゐる。殊に嫁を主とせずに、傍に立たせて、薪割の氣持を主として詠んだ所が面白い。

木綿うり乳母が見る内だいて居る

何うせ木綿賣だから、奥からお内儀が出て來て見たりはせぬ。お乳母どんやおさんどんが、臺所でひやかしてゐるくらゐのもの。そこで、乳母が、あれかこれかと、よい柄を見

立ててゐる間、木綿賣が代りに子供を抱いてやつてゐる、といふのであるが、川柳子の見つけ所も亦かういふ平民的な所にある。

針明の折々くらいすそ廻し

針明は針妙で、おはりの事、良家に奉公して着物などを縫つてゐる女。裾廻しはお針の縁語であるが、暗い裾廻しとは、時々、主人の眼をぬすんで、番頭などと不義を働くと見えた。御給金の他に此の方面からも臨時收入があつて、裾さばきが荒い。江戸の商家の內情では、かういふ愉快でもないと番頭方の勤めも務まらぬ。

拍子木で捨子のまたをあけて見る

男か女かを調べるため。捨子はよく川柳によまれてゐるが、此の句の如く、手ではなくて拍子木でその股をあけて見るとよまれた所に、捨子の多い事も見えて、慘酷な江戸の世相を思はせる。尤も夜番人は、兩手に拍子木を持つてゐるので、一方の手にその二本の拍子木を持ち、他の手であけて見る事が面倒な爲めでもあるし、又、これは冬の事かとも思はれて、いづれにしても夜番人の不精を示してゐるのである。

今暮れる日にけいせいは拘はらず

日は暮れる、うちの首尾も考へねばならず、夜になると、揚代もかさむから、懷勘定をして、早く歸らうと尻をもじ〳〵させてゐるが、女郎の方では一向かまはず、まあ〳〵と云つて落ち着かせるのも、少しでも多く賣りたい心。遊里をよんだ句は川柳には實に多いので、今はなるべく遠慮をしておくが、かういふ、客と傾城の表裏の心情を穿つたよい句は、出す事にする。

大三十日首でも取つて來る氣也

借金取が勢ひ猛に出かける所。かういふ誇張法も亦川柳の特色ある表現法である。

すり鉢に舞をまわせるいくぢなし

私ぢや力がないから、あなた山の芋を摺つて頂戴といふ、細君の命令で、致し方なく、摺鉢をごろ〳〵とするが、こいつなか〳〵うまく行かぬもので、摺子木を舞はす度に、摺鉢は板の間をごろ〳〵と轉げ廻つて、一向摺れぬとは、意氣地なしめ。

借金をいさぎよくする祭まへ

神田明神の祭禮だア、うちの子供にもちつたあ綺麗な着物を着せてやらないぢやあ、と、二十兩三十兩をすつぱり借りては、右から左に呉服屋小間物屋の手に渡る。あとの祟りも構はずに、江戸つ子が祭禮に見えを張るのは、今でもさうだが、昔は特にそれが甚しかつたので、かういふ句も生きて來るわけ。

根津の客髪結床からすつと行き

根津權現の附近には遊廓があつてなか〳〵繁昌した。そこの客は大工のやうな職人が主であつて、いなせな客が多かつた。髪結床からすつと行くといふ所に、そのいなせな姿があらはれてゐる。職人であるから、遊びにゆくとて、別に支度を調へる必要はないから、一たんうちへ歸つてよそ行きの着物を着るやうな事もなく、髪結床から直ぐ身輕に出かけるといふのである。それでも、頭だけでもおめかしをするのは嫖客の心理である。

野雪隱地藏しばらく刀番

途中で糞がしたくなつた。まゝよとばかり、しやがむのに邪魔になる刀をそこの石地藏に立てかけさせて、野糞と出かける。地藏さんはしばらく刀の番をした恰好。地藏を主と

して詠んだので、句が汚くなく、川柳子獨特の見附け所。

懸り人りつばに出來る疊だこ

屁をひつておかしくも無い一人者

どちらも人口に膾炙してゐる句。

紅葉狩どつちへ出ても魔所斗

芝居の紅葉狩では、鬼が出るが、現實の紅葉狩では、北の正燈寺と言ひ、南の海晏寺と言ひ、何れも魔所ならぬ魔窟が近くて、紅葉見の人々がさらひこまれる。向島の正燈寺も、品川の海晏寺も紅葉の名所であるが、程近くに、吉原品川といふ遊里をひかへてゐるので、紅葉狩を口實に、こゝに遊ぶ人が多かつた。芝居の紅葉狩に言ひかけて洒落た所が、川柳子得意の技巧である。

ふきげんを人に知られる鳴子引

不機嫌な時は強く引くからが〳〵とひどくなる。此のやうな句になると、こまかい所を見よう〳〵とする結果、少し邪道に入つたやうな氣もする。

かさもりのだんごは七日母がうり

笠森稲荷の境内に店を出してゐた團子を賣る茶屋は、特に笠森お仙の名で有名である。團子は土の團子で、これをお稲荷さんにあげて願をかけた。お仙の姿は春信等の浮世繪にも畫かれ、小歌にも歌はれた、當時の美人。併し、いくら美人でも、女であるから、女のやくとして、月にあるものだけはあるにきまつてゐるので、一ケ月間毎日店に出て、愛嬌を賣るわけにも行かず、二十八日の中七日間だけは母が代つて店に坐る。少し下がりの句であるが、月の障りに眼をつけた所が川柳子の觀察である。

三度迄産婦へ聞いてじらさせる

細君が産褥についてゐるので、亭主には、一向勝手向の様子がわからぬ。茶飲茶椀は何處に入つてゐるのかい、戸棚かい、茶箪笥かい、と一々尋ねて、しきりにその邊をもぞ〳〵探し廻る。細君は床の上でじれてゐる。我々中流社會の家庭では、よく見かける圖である。

かし本屋何を見せたかどうづかれ

女中衆へ見せるべきものでない繪を見せたに違ひない。女も顏を赤くして貸本屋の脊中

をどうづくが、見度い事は山々。これも大分きはどい心理である。當時の貸本屋の商賣は重にかういふ繪本の傳播にあつたので、おかみが嚴しい法令を出しても一向效果はなかつた。いや、今でもさうなのだから。

張物をいけどりにするにわか雨

生捕の句が實に面白い。大急ぎで張物をそのまゝ抱へこんで取込む様子を形容した句。

こもそうの親はきうせん筋と見え

手相に弓箭筋は劍難の相といふ。そこで薦僧姿となつて、仇を探して歩くからには、その殺された親は弓箭筋があつたに違ひない。薦僧から、その親に連想して、薦僧を詠まずに親を詠んだのは、例の裏を見る川柳子の見附け所だが、此の句はどうもつくりすぎたやうな氣がする。

ひやめしを見い〳〵内儀米を出し

冷飯の分量を測つて、まだ御飯があれだけ殘つてゐるから、あと、何合たけばよい、と、米の加減をしながら桝で測つて出す所。家庭で毎日見かける瑣事であるが、實にうまい所

を詠んだ。かういふ句になると文句なしに感心する。

亭主からものを言出す朝がへり

昨晩廓で泊つて、今朝歸つて來た亭主に、物も言はず押し默つてつんとしてゐる細君の姿、さすが良心が咎めるので、亭主の方から口を切つて機嫌を取る。江戸時代の世相では、毎日くりかへされた朝の情景であらう。

はづかしい時には袖をもちにつき

袖は勿論振袖、まだ白齒の娘であらう。緣談の話か、いや、もつと直接に談判を男から持ち出された時か、否應の返事もせずに、兩方の袖で交互に疊の上を叩きながら、うつむいて默つてゐる。餅につきが川柳式の言ひ方であるが、娘の初々しい姿は片言の中によく言ひあらはされてゐる。

物さしでひるねの蠅を追つてやり

晝寢をしてゐる子供の枕元で、縫物をしてゐる母親が、物指の先で蠅を追つてやる。情愛のこもつたよい句である。

衣川さすが坊主の死にどころ

大坊主の辨慶と衣とを結びつけただけの洒落に過ぎぬが、かういふ駄洒落の句が後にはなか〳〵多くなつてゐる。柳樽三篇にも、こんなつまらぬ洒落の句があるかと思ふと驚いたので、こゝに載せておく。

桶とはな提げて定紋見てあるき

墓を探して歩いてゐる樣。或は墓參りのついでに、他家の定紋を物好に見て歩いてゐるのかも知れない。御苦勞にも、水桶と花、恐らくは線香までも提げて、歩いてゐる所が川柳子の見附け所。その人の顏までが、何だか滑稽に見える。

舟宿で化けやれと師ののたまわく

塾へ漢學を習ひに行く息子、まじめさうな姿で家は出たが、足は途中で舟宿へむき、そこで忽ち通な姿に早變り、子の曰く舟宿で化け給へと、などと洒落ながら、猪牙舟にのつて、隅田川を遡り、日本堤から吉原へと向ふ。江戸時代の息子許りではない、今の學生もやりかねない事。制服制帽で家を出たのに、いつか中折に脊廣で、銀座邊をぶらついてゐ

る者がゐないとは限らぬ。此の句は息子の戯言にしたてた句であるが、その中に、前後の複雜な情景があり〳〵と出てゐる。四手駕籠を飛ばすか、舟宿から猪牙を出させるかが、當時吉原へ通ふ通人の乘物である。

根津のぎうさく料などゝ洒落て言ひ

根津は前にも出た。根津の茶屋の牛（卽ち妓夫、客引の事）は、お客を引つ張るにも、揚代の事を作料などと洒落て、作料を何匁にするからお上んなさいなどといふのは、相手の登樓客に大工が多いからである。つまらぬ句であるが、前の根津の緣でこゝに出した。

此の原稿の載つたのは昭和二年四月の雜誌であるが、翌五月には、武笠氏の「俳風柳樽通釋」の第三編が出た。さうして、その武笠氏も今は故人となつて居られる。人生うたゝ無情の感なきあたはずである。なほ、川柳の歷史についても、その後、海野夢一佛氏の「川柳史講話」の如き好著が出てゐる。

川柳愚解抄

川柳の由來に就きては、阪井久良岐氏の「川柳梗概」、秋の屋主人柳花氏の「川柳難句評釋」の總說、續國民文庫「川柳集」に載れる故中根淑氏の「前句源流」、岡田三面子博士の「川柳史料」（早稻田文學明治三十九年一月號所載）、同博士の近著「寬政改革と柳樽の改版」故佐々醒雪博士の「近世國文學史」雜俳の項等に詳しければ、こゝに敢へて說かず。且つまた、柳樽の初篇の全解には、沼波瓊音氏の「柳樽評釋」あり、三篇迄の全解には、武笠山椒氏の「俳風柳樽通釋」ありて殆ど備はれり。されば、柳樽四篇（明和六年刊）の中より、我が面白しと思へる句、よき句ならざれども解し難しと思はるる句などにつきて愚解を述ぶる事とすべし。人の尻馬に乘るは面白からねば、四篇を釋する事とはなしつるなり。もとより、斯道の大家と雖も、川柳の解釋はいと難しとする所なれば、我等如き淺學のものの考には、誤解多くして、川傍柳の亂れ髮、解きもやらずに、恥かしき事頻りなるべし。

大方の看官達、許し給ひてよ。猶川柳の參考書はいと多けれど、煩はしければ一々こゝにはあげず。柳樽の飜刻書には、前記川柳集(四十五篇まで)いとよろし。また近世文藝叢書の第八第九(六十篇まで、近頃合本一冊となりて、「俳風柳樽」と題し再版せり)、袖珍文庫の柳樽等、何れもよき本なり。「柳樽拾遺」(一名柳樽大全)一冊も出たり。他に「六玉川」、「川傍柳」等の飜刻本もあり。その後、「誹風柳多留全集」三冊出でて、百六十七編まで全部の飜刻成れり。今の所この書を以つて、全きものとなすべきか。前置きはこれくらゐにして早速解釋に移る事とすべし。東西々々

もつと寢てござれによめは消えたがり

新婚の若夫婦に違ひない。消えたがりは、消え入りたいくらゐに恥かしいの意味。何故に恥かしがるかは皆樣御推もじの事。

材木屋さわぐとぎうをよび附ける

ぎうは牛とも書くが、妓夫が正字で、遊里の客引である。併しこゝは、夜鷹の客引の事で、夜鷹は、夕方から、道端の木蔭、または、材木の置場のなかなどに通行人を引つ張つて、

春を鬻いだ賣淫婦。お客は仲間折助等が多かつた。女の亭主が、多くこの客引になつたとは、陰慘な江戸の世相ではある。裏の材木置場の中で、夜鷹と客が大騒ぎにふざけてゐるので、材木屋の亭主が、牛を呼び附けて、大目に見てやつてゐるのだから、もう少し靜かにしろと叱りつける體。

そばがきを猫間の供へやたらしい

蕎麥搔きは更科蕎麥と共に、信濃の名物である。平家物語でおなじみの猫間中納言、大飯食ひで有名な信濃者の木曾義仲の所に使ひに行つて、御飯を山盛りに盛りあげた大茶椀に猫殿もう一杯と强ひられ、閉口した話は先刻御存じの通り。だから御供の者も、そばがきくらゐはやたらに强ひられたであらうと、川柳獨特のうがちである。

藏宿でよんどころなくそりを打ち

藏宿は、幕府の扶持米を預つて、御家人達にそれを配分する所。一に札差宿とも云つた。當時は放蕩無賴の御家人が多かつたので、扶持米を抵當に藏宿から盛んに借金したものである。ひどい奴は、三年五年先の御扶持米までを當にして、前金を借りた。併し藏宿の方

でも、毎々の事とてなか〳〵すぐには承知しない。そこで不良御家人は、よんどころなく、刀のそりを打つて、借さなきや殺らしてしまふと脅してゐる所である。

女房をたのしんで來るすけん物

吉原の冷かし客。文なしで、散歩がてら、ぶらりと廓内に出かけたのだから、始めから上る積りはない。格子先からなかをのぞいて冷かしながら、結局は上らずに、いや、うちの女房が結構々々と、一文も入らない女房を樂しみにして歸つて來るとは、しみつたれた奴。

おやたちは井戸と首とでむこを取

戀煩らひをしてゐる一人娘、あの人でなきや私しや何うでもいや、あの人と添へないくらゐなら、いつそ井戸の中へでも飛びこんで死んでしまひます。首でもくゝります。何うぞあの人と添はして下さいよう、と思ひ詰めたやうにいふと、兩親はすつかり脅されてしまつて、その通り向うに通じて懸け合ひ、結局婿に貰つて、娘の思ひがかなふといふだんどり。井戸と首の簡潔な言ひ方が面白い。或は當人同士の間には既に諒解の成立してゐる場合かも知れない。

てんば下女寢所へ薪を一本もち

あの三助め、いつも夜こそ〳〵人の所へ忍んで來る怪しからぬ奴だ。今晩來たら最後ぶつ叩いてやらうと、薪を一本寢所にかゝへこむとは、さても氣の強いお三どんである。

海あん寺眞赤なうそのつき所

海晏寺は品川にあり。紅葉の名所として名高い。所が、紅葉見物はうちへの言ひ譯で、その實、程近い品川の遊里に繰り込んで、死物の紅葉より、生きた紅葉を樂しんだ者が多かつた。眞赤なうそは、紅葉の色に言ひかけた洒落であるが、うま〳〵と欺されるのは、しかめ面の親父か、世帶じみた女房であらう。

紫宸殿よく化ものの出るところ

菅公のお化、雷公が落ちて、時平を八つ裂きにしたのも紫宸殿なら、源三位頼政の鵺退治も紫宸殿のお庭、よく化物の出る所だ。

仲直り鏡を見るはをんななり

一しきり烈しい夫婦喧嘩があつて、犬も喰はないつかみ合ひの一幕を演じたのち、まあ〳〵

と仲に入る人があつて漸くをさまる。女房はさすがに、早速鏡に向つて、解けた髪を結ひ直す。亭主は亂髪のまゝで、煙草をすぱり〳〵飲んでは、火鉢のふちをやけにひどく叩く。

あいそうも男へすれば疵になり

愛想のよいおかみさん、近所の若い衆に、「おやまあいゝ柄ですわねえ、今度新調なすつたの。よく似合つてよ。それに髪の恰好のいゝ事。何處の髪床に行きなさるの」などと賞めたてようものなら、たちまち長屋中の評判となつて、あのおかみさんは、お隣りの助さんに思し召しがあると後指をさゝれる。

銀ぎせるあつたら事に手ではたき

今なら金時計に金鎖だが、その頃では銀煙管が見えだつたと見える。だが折角の銀煙管も、惜しげなく火鉢のふちでばた〳〵煙草をはたくのとは違つて、手の掌でそつとはたいて吹穀を落すとは、底の知れたしみつたれだ。

武士のけんくわに後家が二人出來

眞劍勝負で、一人は切られ、勝つた方は切腹を仰せつけられ、若後家が急に二人出來る。

喧嘩の主人公よりも、その細君に眼をつけた所が、物の裏を見る川柳子獨特の觀所。

此の原稿は昭和二年に書きたるもの。今見れば多少の感慨なきあたはざるをもつて、聊か補筆して、卷末に附することとせり。

國文學の歴史と鑑賞

定價金貳圓

昭和十五年一月五日印刷
昭和十五年一月十日發行

著者　藤田德太郎

發行人　京都市河原町通二條下ル　渡邊久吉

印刷人　京都市河原町丸太町上ル　堀井二郎

檢印

發行所　京都市河原町二條下ル　人文書院
振替（大阪六壹六參番　東京貳六四五九番）

京都市河原町二條下ル　人文書院　振替大阪八壹六壹參番

藤田德太郎著　國文學の世界　四六判三三〇頁　價二・五〇　送〇・一五

藤田德太郎著　近代歌謠の研究　菊判五〇〇頁　價一二・〇〇　送〇・三三

鹽田良平著　概觀明治文學　四六判三七〇頁　價二・五〇　送〇・一五

河井醉茗著　醉茗詩話　菊判三〇〇頁　價二・五〇　送〇・一五

岸田國士著　時・處・人　四六判三一〇頁　價二・〇〇　送〇・一五

吉江喬松著　朱線　四六判三一〇頁　價二・〇〇　送〇・一五

佐藤春夫著　むさゝび冊子　四六判三〇〇頁　價二・〇〇　送〇・一五

中河與一著　文藝不斷帖　四六判四〇一頁　價二・〇〇　送〇・一五

荻原井泉水著　白馬に乘る　四六判三四〇頁　價二・〇〇　送〇・一五

保田與重郎著　英雄と詩人　四六判三三〇頁　價二・〇〇　送〇・一五

87
33

終